

明治期知識層のキリスト教受容について (2016/10)

キリスト教は明治中後期にかけて、日本の若い知識層を強く引きつけたが、その後、日本にはキリスト教は根づかなかった。それぞれの理由と、より広く民間の思想の動きについてまとめてみる。

1、明治中後期にかけてキリスト教が若い知識層を引き付けた理由は、次の三点が重なってはたらいたと考えられる。

①先進文明圏(欧米列強)の宗教であり、②民族を超えた人類普遍の自由・平等の教えを打ち出し、人権擁護と民主主義の基礎として受け入れられた。また、③個人の信条による宗教という点に魅力があった。

①欧米列強へのキャッチ・アップを急ぐ知識層には、多神教ではない、超越的絶対神の考えが科学的な実学のもとと受け止められた。

これは、次の事例によく示されている。イギリスでは、キリスト教系の自然神(自然の創造主としての神)への信仰(狭義の deism、理神論とも)に立ちながら、電導実験を開発したマイケル・ファラデーに代表される実験主義が展開していたが、1840 年ころ、中国・寧波でアメリカ人宣教師が多神教を排撃し、一神教の布教に電気実験を用い、その理論は『博物学年報』に掲載され、幕末の日本に伝えられていた。琥珀を擦ると生じる静電気の「エナジー」(energy)が宇宙に満ちている(とされる)「気」で受け止められ、エレクトリシティ(electricity)が「電気」と翻訳された(それ以前、平賀源内は「みれきせゑりていと」と音で表記していた)。

また、よく知られるように、キリスト教信仰と個人の起業の精神と結びつけ、多数の成功例をあげたサミュエル・スマイルズ『セルフ・ヘルプ』が中村敬宇によって翻訳され、その『西国立志伝』がベストセラーになった。

社会的背景としては、江戸後期の各藩の藩政改革の波のなかで、幕末維新期の下級武士たちには実学志向が養われており、またアヘン戦争に敏感に反応した。その波は明治中後期

も変わらない。武拳が別に行われていた中国の士大夫層との差異は、ここにある。2-②とも関連する。

②超越的絶対神によって与えられた自由・平等の考え(アメリカの独立宣言には集会・結社の自由も神によって保証されるとされている)が、天賦人權論として受け止められ、自由民権思想を支えた。

これは加藤弘之の初期の考えによく示されている。

③仏教が「家」の信仰であるのに対して、キリスト教は個人の信条による宗教として立ち現れた。自主・独立を強くいう傾向が強い陽明学が受け皿になったことによく示されている。

これは、中村敬宇、加藤弘之、内村鑑三、新渡戸稲造らのキリスト教受容によく示されている。

(各項、鈴木『生命観の探究』第一章を参照。①の「電気」の事例は、鈴木『近代の超克』第二章を参照のこと)

2、そののち、キリスト教が根付かなかった理由も、上記3点に対応している。

①帝国憲法など近代国家制度の整備と、自由民権運動の展開によって、近代的ナショナリズム(民族主義)とそれによる「伝統」の再組織化が進んだこと。和漢の古典学ブームなど。

②殖産興業から富国強兵に進む工業立国方針が浸透するにつれ、キリスト教と切り離して科学=技術が受容されたこと。

これは、エネルギー一元論の時代を察知した伊藤博文により、帝国大学が世界に80年ほど先駆けて工科大学を抱えて発足したこと(東京大学の発足時には、キリスト教神学部にあたるものとして構想されていた、皇学と漢学よりなる「教科」が消えていた)。また、加藤弘之が天賦人權論から自然科学主義に転向したことに代表される。

(『探究』第一章、エネルギー一元については『超克』第二章を参照)。

③帝国憲法が制定され、皇室の尊厳を中心にした民族伝統主義と家族国家論が拡がり、日清・日露戦争を通じて、民族主義が高まったこと。

(家族国家論とその展開については、『探究』第一章を参照)

そして、そののち

④帝国憲法で、信教の自由が保障されたのち(皇室の祖先崇拜は「宗教ではない」とされた)、また「信じる者には救済がある」という考えが拡がり、「自力」による救済をいう禅宗を中心にした仏教、個人の独立をいう陽明学などがブームになったこと。

(『探究』第五章、『超克』第二章を参照)

3、広く民間までふくめて、明治期知識層の入信ブームが終わったことには、次の理由があると考えられる。

1、仏教が檀家制度を通じて、各家の信仰として根付いていたこと。

儒学は現世主義で、聖なるものへの信仰の要素が弱い。道教系の信仰は迷信のように退けられた。国家神道が上から徐々に浸透したこと。

2、浄土教系の教えは、阿弥陀仏を絶対神のように信仰するため、キリスト教の超越的絶対神を必要としなかったことが大きいと考えられる(中国に太平天国の乱が起こったこととのちがいが)。またキリスト教入信者には原罪意識に惹かれる傾向も強かったが、それに似た考えを示す『歎異抄』を浄土真宗改革派がひろめた。

2、日清・日露戦争後に機械文明と激しい競争社会が到来したことにより、生存の危機意識が拡がり、世直し(社会改革)と人々の魂の救済が求められる時代に入ったとき、1910年の大逆事件ののち、社会主義思想はその全般が弾圧され、国際的に高まっていた生命を原理とする様々な考え(いわゆるヴァイタリズム諸潮流に加えて、トルストイの「神は生命なり」の思

想)が神・儒・仏の伝統思想で受け止められ、実に様々な流れが形づくられ、国際的にも突出して流行したこと。

(『探究』第六～八章、『超克』第二章を参照)